

## 編集後記

編集委員として平成25年5月以降3回目の編集後記を記させていただきます。約3年間の編集委員としての業務で、会員の皆様の多くの投稿原稿を拝読していくつか気づいた点がありましたので、以下にまとめて感想を記させていただきます。

1) 本誌に投稿される原稿は、一般的に大変完成度が高いと評価します。共著のシニアの指導者の御指導が反映された結果と理解します。将来研究論文を記す若手会員にとっては、症例報告にしても論文の作成過程から考え方を現地で指導を受け体験する大変貴重な機会になっていると理解します。査読者および編集委員も論文に記載された新規の内容を尊重してかつ建設的なコメントとなり、より本誌の読者諸氏に役に立つ情報の発信を目標としています。今後も本誌に投稿することおよび本誌を読むことが、今まで以上に会員に利することになる様に良い伝統が継続できることを望みます。

2) 本誌は大変貴重な症例報告が掲載されることが重要な特徴でまた会員にとって重要な情報源となっています。昨今の欧米のジャーナルはImpact Factorが少しでも高くなることに腐心すれば、症例報告の被引用回数は研究論文より格段に低くなる為に、勢い症例報告の掲載を極端に制限する傾向になります。その結果、症例報告の重要な臨床情報から追体験して学ぶ機会が減る弊害が起こり、それを是正する為にcase reportに特化したweb journalが最近創刊

されるという奇妙な現象がでてきました。母国語で症例報告ができる本誌の特徴は、今後若手の教育では最も重要な役割の一つと理解します。

3) 論文の内容の新規性に関しては、投稿時の著者の自己評価と発表後の他人の評価は必ずしもいつも一致しません。むしろ淡々と事実を記載した内容の論文が実は後日重要な内容として評価されることがあり、また逆に期待したほど評価されないこともあります。重要なことは、新規事実を正しく報告することと理解します。「論文は未来の読者へのメッセージ」(本誌53巻10号編集後記)の思いを益々強くします。

4) 投稿原稿の脳波の図では、時間と振幅の表示がないことが時にありました。また分かり難い表現等も時にあります。(脳波の時間と振幅の無表示は21世紀になってBrainの論文にも稀にありましたので、油断をすると誰でも同じミスをおかす様です。)読者の立場で第三者的に最後に原稿をチェックして頂きますと、これは随分減るのではないかと理解します。

本誌は日本の臨床神経学の活動レベルの当にbiomarkerですので、今後も本誌が益々活発な切磋琢磨と報告の場となりますように、多くの投稿がありますようお願いいたします。

(池田昭夫)

## 〈編集委員〉

編集委員長 鈴木 則宏 編集副委員長 河村 満  
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡  
 瀧山 嘉久 西野 一三 野村 恭一 星野 晴彦  
 編集委員(幹事兼任) 園生 雅弘 高尾 昌樹 森 秀生

「臨床神経学」 第56巻 第4号 平成28年4月1日発行  
 編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会  
 発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 高橋 良輔  
 印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル  
 日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>